

研究主題

「進んで自分の考えを表現しようとする児童の育成」
～書く活動を取り入れた国語科学習指導の工夫～

1 学校の概要

本校は、学級数22（特別支援4を含む）で児童数542名の中規模校である。

「未来を生きる畑沢っ子の育成～人とのつながりの中で、知・徳・体を育む〈自立と共生〉～」を学校教育目標に掲げ、学力指導の充実(学力向上)やICTの活用を重点として日々の教育活動に取り組んでいる。目指す児童像の1つにある「よく考え進んで学ぶ子」の具現化に向けて、①主体的・対話的で深い学びの実現による授業改善、②国語力の向上、③少人数指導の活用、④家庭との連携を指導の中心に据えて指導にあたっている。また、今年度は全ての学年で交換授業を行い、児童と多くの職員との関わりを通して、学力向上や児童理解を目的に実践している。

2 研究の概要

(1)児童の実態と課題

昨年度の全国学力・学習状況調査の国語科の正答率は、全国や県より下回り、「記述形式」の問題も全国や県や正答率には届かなかったが、一昨年の結果よりそれぞれの平均点に近づいてきている。また、研究前から本校の課題であった記述問題の無解答率は、3問中2問が全国平均を上回った。

昨年度の研究を通して、授業や朝学習の中で書く活動を取り入れる意識が職員の中で高まってきたことに加えて、児童が文章に書き慣れてきている様子がうかがえた。

昨年度の研究を土台に、今年度も次の仮説で取り組んだ。

国語科の学習の中心に書く活動を継続的に取り入れ、児童の意欲を高められるような学習の工夫をすれば、主体的に表現しようとするだろう。

昨年度は、書く活動を中心に授業展開を行った。今年度は、仮説の中の「継続的な書く活動」と「意欲を高める学習の工夫」の2点を具体化していった。「継続的に取り入れる」は、①単元や1時間の授業の中に書く活動を細かく取り入れること、②文字数や文章中の言葉やキーワードを取り入れた条件的な記述を取り入れること、また、「児童の意欲を高められるような学習の工夫」は、①目的意識や相手意識を持たせていくこと、②書いたものを効果的に活用した交流の場を設定することとし、これらの学習の内容を更に細かく設定し、内容を職員全体で共有した。

(2)学力向上のための取組

①「全国学力・学習状況調査」の結果からの授業改善

今年度は、国語科の記述形式を中心に職員で問題を解き、児童の解答用紙を用いて、誤答の要因を話し合った。また、質問紙調査の内容と合わせ、各学年の授業改善に向けた具体的な取組について話し合い、全体で共有することができた。

以下は、話し合った内容である。

a 児童の誤答の要因

- ・答えを書いていると〈問われていること〉や〈条件〉を忘れてしまっている。
- ・条件作文を書いた経験が少ない。 ・一文が長く、内容が分かりにくい。
- ・資料をしっかりと読めていない。 ・情報を処理し切れていない。 ・時間内に見直せない。
- ・感想の理由を「すごい」「おもしろい」という表現を使うため、伝わりにくい。

b 児童生徒質問と併せた授業改善について

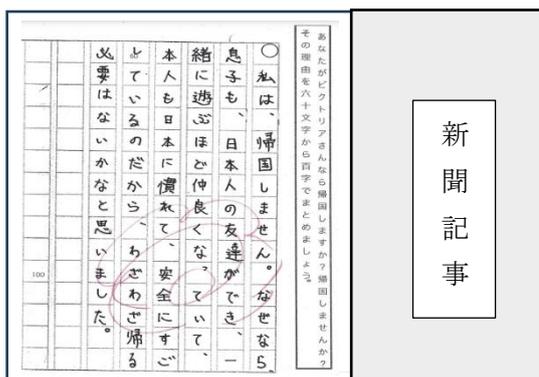
- ・ 心情や語彙を理解するために動作化を取り入れた授業
- ・ 文章整理を意識した授業
- ・ 条件作文や要約を取り入れた授業
- ・ 相手意識や目的意識をもたせた授業
- ・ 結論(自分の考え)を適切な言葉や文章で表す場を取り入れた授業

②国語の授業以外での継続した「書く活動」(短作文)の実践

昨年度は、児童が「書きたくなる」テーマを設定し、自由に考えを書くテーマ短作文を毎週行った。昨年度の全国学力・学習状況調査を職員で分析をしたところ①限られた時間で文章を読めず、内容を十分に理解できていない、②限られた文字数で書き表すこと等に課題があると分かった。

そこで、テーマ作文だけでなく、今年度は新聞記事を活用した新聞短作文を取り入れた。新聞短作文を通して、新聞記事を読み取り、自分の考えをまとめる力の育成を目指した。低高学年別に日々のニュースや各地の行事を題材とし、読みとった内容から60～100文字程度で自分の考えをまとめた。

その後、学年で1名(1～6年・特別支援学級)を代表とし、校内に3箇所ある短作文ひろばに掲示し、交流の場とした。また、掲示する短作文には、児童の思いが伝わる一文や文型を正しく使えている部分に赤線を引き、読む児童が上手な表現に着目しやすいようにした。



〈新聞短作文〉



〈短作文ひろば〉

③授業研究会 (年2回)

「書けそう」「書きたい」という意欲がもてる学習過程の工夫、その意欲を持続させながら自分の考えが表現できる児童の育成を図っていきける授業を目指し展開した。また、目的意識や相手意識を明確にし、書いたものを交流する場を設定した。

〈各学年の展開授業〉

学年	単元名 (上段) 教材名 (下段)	本時の活動
1	「すずめのくらしブックをつくろう」 『すずめのくらし』	「すずめのくらしブック」作成に向けて、写真から「問い→答え→説明」をシールで色分けしながら、説明文を書き、書いた文章を全体で交流する。
2	『くりかえしのあるお話』ブックをつくろう 『きつねのおきゃくさま』	日々の読書活動を通して、繰り返しのある絵本を見つけ、お気に入りの物語の言葉や場面や登場人物の行動を入れながら、心に残ったことを感想文にし、全体で読み合った。
3	「生き物サバイバルブックを作ろう」 『クラスの生き物ブック』	生き物の一部に焦点を当て説明するため、資料を引用したり、「～のような形」の言葉を使ったりして、低学年の児童に伝わるようにまとめた。班で読み合い、表現の良さを伝え合った。

4	「短歌の楽しさを味わおう」 『短歌の世界』	お気に入りの短歌のイメージを絵で表現し、短歌の言葉を使って心情や風景を説明しながら、紹介文をまとめた。同じ短歌を選んだ人同士で集まり、短歌の面白さを話し合った。
5	「事例と解説をもとに筆者の考えをよみとこう」 『事実と言葉』	筆者の3つの考えから、自分の考えに似ているものや納得したものに自分の体験を踏まえてまとめた。全体で交流し、様々な考えと触れ合うことで、各自の考えを広げることができた。
6	「文章と資料をあわせて読み、筆者の考えをとらえよう」 『雪は新しいエネルギー 未来へつなぐエネルギー社会』	意見文を書く際、どのようなことに気をつけて述べたら良いかを課題とした。筆者の主張の仕方や説明の仕方工夫している良いところを取り入れながら、自分の考えをまとめ、全体で交流した。

1年生『すずめのくらし』



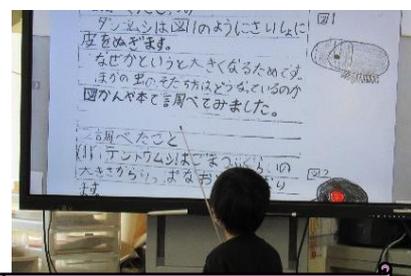
「すずめの様子の説明文」

2年生『きつねのおきゃくさま』



お気に入りの絵本紹介

3年生『クラスの生き物ブック』



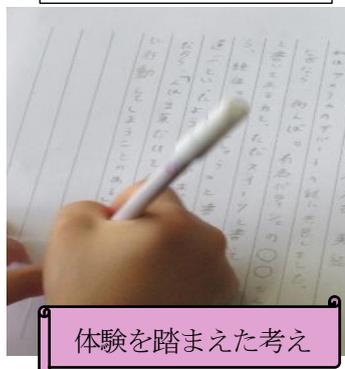
生き物の体のひみつ

4年生『短歌の世界』



お気に入り短歌紹介

5年生『事実と言葉』



体験を踏まえた考え

6年生『雪は新しいエネルギー
未来へつなぐエネルギー社会』



意見の述べ方の工夫

(3)加配教員（少人数指導教員）の活用

【指導体制】

- ・高学年の国語科において、担任とチーム・ティーチングで指導にあたる。

【指導内容】

① 児童への支援

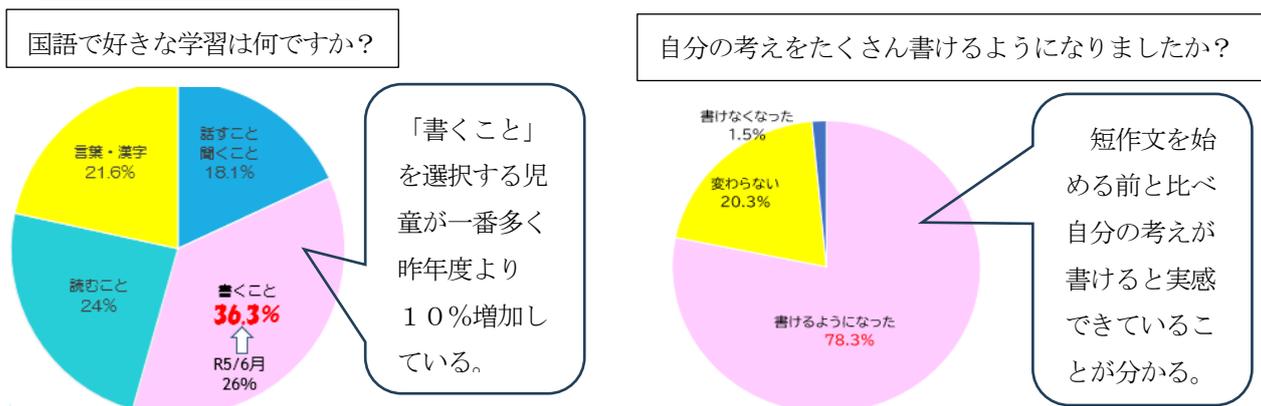
- ・支援を要する児童の個別指導を行う。 ・話し合いが円滑に進むように声かけをする。

② 担任への支援

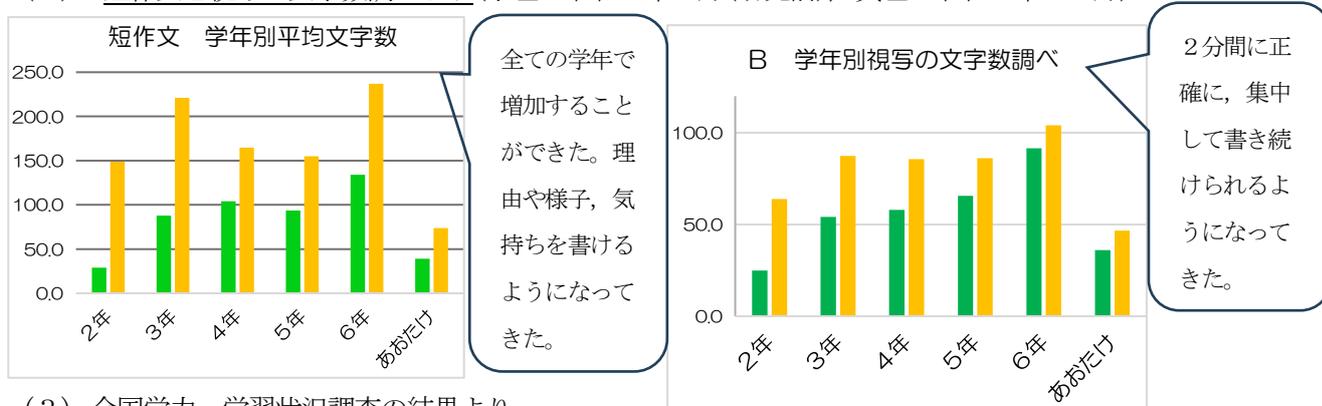
- ・単元によりT1として授業を進める。 ・範読や児童の音読の確認を行う。 ・指名計画の補助。
- ・一緒に教材研究を行う。 ・児童の意見や教科書の文章を板書する。 ・ドリルやプリントの採点。

3 研究の成果

(1) 児童の意識アンケートより (調査：令和6年9月)



(2) 短作文と視写の文字数調べより (水色：令和5年6月(研究前)／黄色：令和6年12月)



(3) 全国学力・学習状況調査の結果より

国語科の記述形式の無解答率は、全ての問題で県や全国平均を下回ることができた。問題によっては、9%近く下回ることができた。また、算数科の全ての記述形式の無解答率も全国や県平均を1~9%下回ることができた。

児童生徒質問の中の「今回の国語の問題では、解答を文章で書く問題がありました。それらの問題について、どのように解答しましたか。」に対して、「全ての書く問題で最後まで解答を書こうと努力した。」と90%近くの児童が回答し、前向きに取り組んでいることが分かった。これは全国や県平均と比べると9~11%上回ることができ、算数の質問でも同様であった。

(1)~(3)の結果より

- 国語科を中心に継続的な書く活動を取り入れたことで、日常生活の中で書く活動が当たり前の活動になっていった。この積み重ねにより、自分の考えをもち、文章化しようとする姿が多く見られるようになった。
- 相手意識や目的意識を明確にし、書いたものをいかして話し合う場を設定したことで、自分の考えを伝え、友達の意見と比べたり認めたりするなど、学び合うことができた。
- 国語科を中心に取り組んできたが、他教科でも書いて表現するという意識が芽生えてきた。また、「どんな言葉で」「何を伝えるか」を考えながら文章にまとめられるようになってきた。

4 今後の課題

今年度の研究成果は見られたものの「全国学力・学習状況調査」の国語の正答率は県や全国平均を下回ってしまった。児童の主体性を大切にしつつ、授業改善を通して問われたことに対して、正確に書くという部分を育てていかなければならない。